旧下真倉村村社

日枝神社

館山市下真倉一番地

祭神

大己貴神（おおなむち）
大山咋神（おおやまくいのかみ）

宮司・酒井昌義

青柳 日枝神社

由緒

日枝神社は、拝殿から城山とその裏に広がる鏡ヶ浦を望むことのできる高台に位置します。江戸時代には日枝神社の前身である山王社として下真倉に鎮座しており、明治の神仏分離令にともない山王社は日枝神社に改組され、大正三年に現在地に遷座されました。

「本宮」と書かれた日枝神社社号額は、初代義光の緻密な彫り物に囲まれ、その文字は明治天皇に仕えた伯爵・万里小路通房により明治三十年に揮毫されたものです。また、拝殿内には大きな「鏡ヶ浦図絵馬」が大正四年に地元・道橋梅吉氏により奉納されています。

絵馬：「鏡ヶ浦図」大正4年

日枝神社社号額（明治30年）
万里小路通房　揮毫

自慢の祭

青柳地区のお祭りは一日目の大神輿（おおでん）と小神輿（こでん）の渡御に、たてやまんまち唯一の羯鼓舞があります。羯鼓舞は子ども達を中心に行われ、雄、雌、中と呼ばれる三匹の獅子についた太鼓と十人程で合奏される笛とで囃し、お浜入りと呼ばれる館山桟橋、館山神社神輿入祭の前に奉納され、青柳地区祭礼の見せ場のひとつです。

大神輿は、城山から鏡ヶ浦までが一望できる高台に鎮座する日枝神社拝殿脇の神輿庫から、二本棒にて狭い石畳の階段を担いで降り、鳥居前の境内にて脇棒を締め、四本棒にて氏子内への渡御が始まります。

たてやまんまち唯一の羯鼓舞

館山神社境内での渡御

館山神社入祭後には、四方に躍動感ある龍が彫られている昼間用露盤を夜用の露盤に取り替える「ますがえ」が幹事役によって行われる仕来りがあります。

初代義光の彫物が入った昼間用露盤

8/1・2 館山のまつり

祭りの起源　大正三年、旧館山町（現在の青柳、上真倉、新井、下町、仲町、上町、楠見、上須賀地区）と、旧豊津村（現在の沼、柏崎、宮城、笠名、大賀地区）が合併し館山町になったのをきっかけに、大正七年より毎年十三地区十一社が八月一日・二日の祭礼を合同で執り行うようになりました。その後、大正十二年の関東大震災により、諏訪神社（下社）、諏訪神社（上社）、厳島神社、八坂神社の四社が倒壊したため、協議により各社の合祀を決め、昭和七年に館山神社として創建されました。

現在は館山十三地区八社として、神輿七基、曳舟二基、山車四基がそれぞれの地区から出祭しています。愛称「たてやまんまち」として、城下の人々によって伝え続けられてきた〝心のまつり〟です。

館山神社境内に勢揃いした神輿

たてやまんまち御濱出渡御

二日目の地回りでは地区内を隅から隅まで回り、神輿歌や神輿に威勢をつける時に歌われる木遣り歌、また甚句などの見せ場があります。

二日目夜に訪れる団長宅ではご馳走とお酒が振舞われ、高張提灯の周りを回りながら歌い踊る甚句の掛け声「どすこい、どすこい」が響き渡たり、青柳のお祭りは最高潮に達します。

子どもから年配の方までがひとつになった自慢の神輿祭りです。

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。